

メッセージアウトライン マタイの福音書7：13～14 「狭い門から入りなさい」

[13-14]「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門はなんと狭く、その道も何と細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです」

今回は7：12節から「人からしてもらいたいことは何でもあなたがたも同じようにしなさい」という最も大切な教え、黄金律を学んだ。これは罪深い人間が自力でできることではなく、そのためには神の御子イエス・キリストを自分の救い主と信じる者に与えられた助け主なる聖霊により頼んで、そのことを実行できるように祈り求め続けていく必要があることを教えられた。

そして今日の箇所からはこの山上の説教の最終的な部分に入っていく。ここでイエスが教えようとされていることは、イエスに従う者はどのように信仰の歩みを進めなければならないかということであり、それをこの箇所では狭い門と広い門、狭い道と広い道という対比を用いながら教えられていく。

「狭い門」とは何か。それはイエス・キリストを自分の救い主と信じる者が入らなければならない門である。いや、すでに信じた、信仰を持ったということはこの狭い門から入ったということである。門は目的地に行くための入口である。

イエスはヨハネ10：9で次のように言われている、「わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら救われます」。それでイエスを自分の救い主と信じた者はこの狭い門から入っていることになる。

しかしながら、それがゴールではない。まだそこからの狭く細い道が続いていくのである。

ところで、イエスはここで「狭い門から入りなさい」と言われる。それはまだ門を通過して入っていない人々がいるということが前提になっている。それは今ここでイエスの説教を聞いてはいるが、まだイエスを救い主と信じていない人々のことである。イエスは今までに神の国の救いの福音を宣べ伝えながら多くの病人を癒し、悪霊につかれた人々から悪霊を追い出し、弱った人、苦しみの中にいる人々、貧しい人々とともに歩み、各地方を巡って来られた。それでイエスのうわさを聞いた多くの人々はイエスを一目見よう、その奇跡のわざを見ようとして集まって来た。もちろんそういった人々だけでなく、真にイエスの話を聞いて従いたいと思う人々もいたであろう。そのような種々雑多な人々

こそ今、イエスが話しかけておられる対象である。彼らはイエスの話を聞き、どのような決断をするのか。

狭い門から入った者は、狭く細い道を歩まなければならない。それは信仰のゆえに受ける様々な苦しみ、悲しみ、困難といったものであろう。道が細いゆえに迷ったり、進めなくなったり、座り込んだり、バックすることもあるかもしれない。そこには茨が茂り、深い川が流れ、ごつごつした岩石地帯があるかもしれない。しかし、それはいのちに至る道、天の御国へ続く道であり、永遠の祝福へと続く道なのである。イエスも人としてこの地上におられたときには様々な困難や苦しみを受けられた。サタンの誘惑、ユダヤ人からの迫害、弟子の裏切り、権力者からの圧迫、殺意、そして十字架。それゆえ、狭い門から入り、狭く、細い困難な道を歩む者たちは、その道にイエスの足跡があることに気がつくのである。覚えておかなければならないことは「いのちに至る門は狭く、その道も細く、それを見出す者はわずかです」とイエスが警告されていることである。イエス・キリストを救い主と信じ、従う信仰者、クリスチャンは何かの主義、主張、思想などによって大量生産されることはなく、一人ひとりが真剣にイエスの言葉に耳を傾け、自分の罪を自覚し、その罪のゆえに神から受けなければならない刑罰をイエスが身代わりとして十字架にかかって死んでくださり、三日の後に死を打ち破って復活され、確かに救いを完成して下さったことを知り、そのイエスを自分の救い主と信じ受け入れ、犠牲を払って従う決意、覚悟が必要なのである。

罪とは人間とこの世界とすべてのものを創造された真の神に逆らい、その神を知ろうともせず、自己中心に生きていることであり、それは真の神に対する意識的な反抗、消極的な無関心などの形で現れてくるものである。

さてでは大きな門と広い道とは何か。イエスははっきりと、それは滅びに至る門であり、道であり、そこから入って行く者が多いと教えられている。

この世の流れに合わせて生きていく生き方は容易である。近所づきあいしかり、葬儀におけるしきたりしかり、社会における付き合いしかり、会社における上下の人間関係しかり。他の人と合わせていくことしかり。これは大過なくこの世で生きていくための知恵であろうか。もちろん地域や町を良くする、住みやすくするための協力ならば問題なく、かえって良い証しになるであろう。

→マタイ 5 : 13~ 16、38~ 48、7 : 12

しかし、真の神を知らず、サタンの支配下にあるこの社会で、一人だけ真の神を信じる信仰のゆえに、できません。遠慮させていただきます等々の別の道を行くことを主張するならば、そこに緊張と不協和音、そして問題をもたらすことも避けられないであろう。

クリスチャンは日曜日を聖日とし教会に行き、神を礼拝する。しかし、世の人々はそうではない。

日曜日の地域の公園の草刈り、防災訓練、運動会、夏祭りへの参加協力、地域の清掃、自治会の総会、組長会等々、様々な出来事がある。そして家族の中で自分だけが信仰者ならば、家族との問題も出てくるであろう。私たちは行事を土曜日に変更してもらったり、それがだめなら、前日に自分でできることを行って、自分の義務や割り当てを果たしていく努力が必要かもしれない。そのための知恵を神に祈り求めていくことも大切なことである。

社会で大過なく生きていくことの何が悪いのかと問われるかもしれないが、大過なく生きていくことが悪いのではなく、真の神を知らず、知ろうともせず、罪の中に生きてこの世の生涯を終えてしまうことが問題なのである。それは広く、多くの人が歩んでいる道かもしれないが、その最後は滅びに至るのである。滅びとは死んで火葬されて灰になって墓に葬られてそれで無になってしまうというのではなく、この地上の生涯の最後の総決算として神の前に立ち、神の愛と救いを受け入れなかった者として、さばきを受け、永遠の滅びに行くということなのである。そしてそこで永遠に苦しみを受けなければならないと聖書は教えている。

→ヨハネの黙示録 20：11～15

私たちの人生はこの世だけで終わるのではない。この地上の生涯を閉じる時、どこへ行かなければならないのか、どこへ行くべきかを真剣に考え、真の神とその愛と、神の御子イエス・キリストの十字架による救いを信じ受け入れて、たとえそれが狭い門で、そこから続く道が細く狭く困難な道であっても、ゴールは永遠のいのちであり、祝福と恵みに満ちた神の国が待っていることを覚えて、私たちは狭い門から入り、細く狭い道を歩み続け、前進していく者とならなければならない。

マタイ 16：24～27「それからイエスは弟子たちに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるのでしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。人の子は、やがて父の栄光を帯びて御使いたちとともに来ます。そしてそのときには、それぞれその行いに応じて報います。』」

ヘブル 12：1～3「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、一切の重荷とまとわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競争を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでい

なさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず
に十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。あなたがたは、罪人たち
の、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あ
なたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです」

ヨハネ 3 : 16 「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛され
た。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持
つためである」

